

自由と生存の家 見学会 報告



2008年末のニュースとして衝撃的な話題であった「年越し派遣村」。リーマンショックから派生した不況の波は派遣社員のカットにつながり、雇用の保証のない労働者の解雇は格差社会を世間に知らしめ、社会的問題へと急浮上させた。今回は、2009年もうひとつの住まい方フォーラムで紹介した、フリーター全般労組（以下F労）による「自由と生存の家」を訪れた。この真に迫る命名の住居は、いわゆる派遣切りを契機に、解雇されて、社宅も追い出され、お金も住まいも困っている人々に、「住まいが無いなら、作ろう」と立ち上がった人達

により開設されたアパートである。6月13日、もうひとつの住まい方推進協議会による「自由と生存の家」見学会とディスカッションを報告する。

F労(フリーター全般労組)とは?

F労が設立されたのは2004年。組合員数は2006年30名、2009年150名、2011年250名と派遣社員の増加と共に年々増加している。20代から40代が中心で、男女比は7対3で、女性が増えてきているという（最近では、キャバクラユニオンからの雇用条件等の相談も多数来ている）。組合員は有期雇用契約で、非正規率は約9割にのぼる。個人年収は120万円未満が1/2を占める。収入で、組合費を決めているので、月収10万円未満は組合費月額500円。相談内容は「解雇」「契約打ち切り」等である。

F労の住宅部会の活動は、2008年6月のF労定期大会で「住宅部会」に承認され、9月に組合員を対象に「住宅問題アンケート」を実施した。その冬に前述のリーマンショックからの不況が来て、「越冬」と「派遣切り」の相談が多数あった。そこで、実際にアパートを確保する取組みとなったが、F労ではアパート経営はできないので、住宅部会有志による「自由と生存の家実行委員会」が行うこととなった。

経緯～大変だった改修と自由と生存の家の誕生

2008年11月アパートなら都会の便利な場所をと物件を探し、東京メトロの駅から徒歩1分の四谷三丁目の木造アパート2棟を借り受けた。大家さんの「ちょっと手を入れれば…」の言葉を鵜呑みに、2009年2月にアパート改修を開始し、約半年に渡る改修工事で完成した。

A棟1Fの4部屋を8部屋に改修をするなど計16部屋を改修。のべ600人がボランティアで改修に参加した。当初は簡単に考えていた改修だが、素人の手に余るあまりに大変な作業に、後半は有給体制となった。A棟1階の傾いた床、落ちそうな壁など、プライバシー確保と共有スペース製作は本職の大工仕事となった。そして完成後も、さまざまな改修工事が必要だったため、予想以上に経費もかさんだ。大家さんとは5月に契約し、6月より家賃支払いが開始し、2009年8月、晴れて、全室オープン。しかし、この自転車操業的対応では、当然資金にいきづまる。当座資金はF労からのカンパ100万円のみ。そこでサポーターズクラブを立ち上げたところ、1口1万円の呼びかけに約120名が応じてくれた。その後、中央労金の助成金を3年間受けることができ、大家さんも工事費500万円の半分を負担してくれた。また、F労住宅部有志の「自由と生存の家実行委員会」のメンバーには1口12万円でカンパを募ったところ100万円ほどが集まった。こうしたたくさんの善意の集まりで、この事業が成立している。「実際にやってみて、あいまいな事柄を決定していく過程が大変であった。こんな大掛かりな大工仕事になる

と思わなかった。」と代表の菊地謙さんは言う。

困ったら相談できる人がいることの安心

このアパートを借りるにあたり、連帯保証人には、菊地氏になった。2つの建物で月に家賃収入が50万円ほどとなる。ちなみに、以前の大家さんの家賃収入は73万円であった。「自由と生存の家」の各部屋には、保証人なしで入居でき、ほとんど家賃の滞納もない。困ったら相談してくださいと居住者に話していると菊地さん。ここは力になれる仲間に出会える場所である。生活保護なら、住宅扶助も支給されるので、その利用も可能。シェルター的ではあるが、一時的ではなく、次のステップにつながればと思うが、そこは、人により様々であるようだ。時には、雨宮処凛氏からのネットカフェ難民のSOSに応えたこともある。

入居者の状況

<p>☆Hさん（男性：20代前半） 職業：整体技術者 前住居形態：実家 ■公開募集をインターネットを覗いて応募。 ■整体師の修行に東京へ。給与が低いため住居費を抑えることと、家の趣旨に面白みを感じたとのこと。 ■入居後の状況…安定</p>	<p>☆Mさん（男性：50代前半） 職業：自営 前住居形態：アパート ■自営の露天商を営んでいるが不況により生計維持が困難となり支援団体の紹介で応募。 ■当初は生活保護の活用も検討されたが、本人が扶養照会を望まず通常入居となる。 ■入居後の状況…安定</p>	<p>☆Dさん（男性：30代前半） 職業：見習大工 前住居形態：実家住まい ■自由と生存の家改築工事にボランティアとして参加。途中より有給ボランティアとして仕事を担う。その中で、自身も入居となる。 ■入居時は失業給付。後大工見習月収15万前後</p>
---	---	---

2009年完成からの、貧困と闘う活動

F 労の活動として、2009年4月に、設立記念シンポ「生活の場を奪われた者のたたかいと自治的空間の創造を開催（100人参加）。9月に開催した、「希望を持ち働ける仕事とは～派遣切り・自由と生存の家・仕事おこしの現場から可能性を探るシンポジウム&納涼ビール会には、30人参加。2010年4月『開設1周年・第2号建設に向けて、安心して暮らせる住まいとは？』（60名参加）、5月『家と仕事を取り戻そうー「自由と生存の家」住宅確保と仕事づくり』（70名参加）など、住まい・仕事が無いなら、つくろうと様々なシンポジウムを開催してきた。また、2009年11月から自由と生存の野菜市を始めた。販売する野菜は、東峰ベじたぶるん（成田市）株式会社GPS（バルシステム）から、有機・無農薬野菜の供給を受けている。今までに27回ほど開かれて、地域での認知度もあがっている。毎月野菜市と様々なイベントをコラボレーションさせながら、「貧困」「社会問題」等を独自の切り口として展開している。

部屋の構成

自由と生存の家のA棟は、1階に8室(各4畳)、2階に4部屋（各6畳+2畳キッチン）、B棟は1階に自由と生存の家実行委員会事務局、2階3部屋（4畳、5畳、6畳）で、構成されている。A棟の1階は、4畳くらいの、大人1人が暮らすのにやっとの大きさで、居室の中には、水周り設備は付いていない。1階の住人8人が共同で使う、トイレが2つ、シャワーが2つ、台所が2つ、洗濯機2つ乾燥機2つがあり、きれいに使われている。

自由と生存の家実行委員会の法人化

自由と生存の家は、現在はF 労の有志で構成されているのだが、今後、一般社団法人を目指そうと取り組みを始め、以下を目標としている。

- ①低所得層が安定して生活を営める住宅の供給事業
- ②労働・生活相談や文化・交流など新たな支え合いの仕組みの設計・開発事業
- ③肉体的・精神的・社会的に追込まれ生活保護制度に頼らざるを得ない仲間の支援事業
- ④不安定な生活を強いられている仲間の実態についての広報・提言事業

自由と生存の家には、「あんな奴らにできるなら…」と見学者が多数訪問している。この取り組みが各地に広

がればいいのだがと菊地さんは言う。そして、現在、第2の「自由と生存の家」を茨城県に計画中である。「自分が住んでいたせいか、茨城県の方が東京より貧困が深刻に思える。」と菊地さん。茨城不安定労働組合の活動から、派遣切り・生活保護取得支援が始まった。住宅を確保できない問題から、貧困ビジネスにつながってしまう。この事業では、貧困へのスパイラルを断ち切る助けになりたい、「住むところの確保」から次は「仕事」へとつなげたいと語る。そのためにも、自由と生存の家実行委員会の一般社団法人化が早期に望まれる。

これからの貧困の解決には

大家の原田さんは、「3/11の大震災以後の世界はがらっと変わった。昔から貧困に苦しむ人は多くいた。貧しくて志が高い人はいいことを考える。この自由と生存の家は、立派な都市の再開発だと思う。誰かが言い出してあきらめずに、みんなでやるのはいいことだ。人はその思い入れを貫くことが、大事だなどつくづく思う。不動産業では、人間ていやだなと思うことも多いが、この人たちは本当にさわやかでいい人たちだ。第2第3の生存の家を作りたい。」と感想を述べてくれた。そして、「マンションには、住まなくなった後に処分するシステムがないから、いずれ空き家だらけになる。その反面家のない人も多くいる。相続人がいない人も多くいる。そういう人はどんどん自宅を寄付すると良いのではないか。」と第2・第3の自由と生存の家の事業についてヒントも与えてくれた。

会場からは、行政で支援したいというが、貧困ビジネスと自由と生存の家の違いは何かとの質問が出た。菊地さんは、「狭い部屋で、たくさんの生活費を取ってしまうのは、結局その人の自立につながらないやくざ的な貧困ビジネスのやり方。社会にはそれが無いと生きていけない貧困ビジネスを必要とする人もいるが、必要として現実に存在している貧困ビジネスは、福祉における政治の貧困である。一方自由と生存の家は、安い部屋を提供しながら、居住者の自立と自由を支えてることを目指している。」とコメントした。一度落ちてしまった貧困から自立へ向う大きなハードルを感じた。社会がつくりあげてしまった貧困の問題に市民がしっかり目を向け、社会で解決しないとイケない。3/11以降の新しい社会づくりへ真剣に向き合い、そして本当に必要なのは自由と生存の家を作り上げた人々の精神と社会のニーズに応じた政策と感じた。



A棟1階の個室 住人に断り撮影



上・共同のシャワー、棚
下・共同のキッチン



上・共有スペース
下・パネラー左菊地氏、右原田氏